

社会情報学研究, Vol. 13, 11-28, 2007

子ども活動・子育て支援NPOについての考察

—「呉こどもNPOセンターYYY」を事例に—

大藤 文夫*・山本 和子**

Consideration about the Child Activity and Child Care Support NPO
— “Kure Child NPO Center YYY” in an Example —

Fumio Ootou*・Kazuko Yamamoto**

In late years child care support and the socialization of the child care are emphasized. However, the effect of the action is weak when society doing child care is too far and is too big and becomes stiff. It is more imminent society that is necessary for child care. In this article, we consider activity of the NPO as the leading figure of the child activity and child care support. As an example, we take up “Kure Child NPO Center YYY” (It is sketched with YYY as follows). And, by analysis of questionnaire to the member of YYY and its activity, we consider significance and a trend toward growth of YYY. The action program of YYY is based on “Convention on the Rights of the Child” and brings up the independence of the child. A characteristic of the organizations of YYY is that it is an association, and a child and an adult are members. The following points mainly became clear. Primarily, activity of YYY makes a new network. Second, close human relations are made through activity. Evaluation of the member about activity and these relations is high. Third, therefore, intention to the participation of the member is strong. Last, a problem of YYY is that there are few members, and it is necessary to develop activity in civic collaboration.

Key Words (キーワード)

Child care support (子育て支援), Socialization of the child care (子育ての社会化), Social networks (社会的ネットワーク), NPO (NPO), Civic collaboration (市民協働)

1. はじめに

近年とみに子育て支援、子育ての社会化が強調されている。「子育て中の母親の孤立化」が問題である以上、それはあり得る選択肢の一つである。また子育てというのは、子どもの側からすると子育てであり、子どもと保護者との相互作用、つまり子ども活動・子育てと理解されるものである。本稿ではそのような子ども活動・子育て支援の一つの主体として、市民活動、住民の相互扶助の系に属するNPOの活動を探り上げる。NPOはボ

ランティア・サークルの発展型として理解でき、今日、その活動には大きな期待が寄せられている。また市民協働の時代にあっては、NPOの活動はそれ単独ではなく、他の市民活動、また行政や企業の活動とも関連させて議論されるべきである。地域生活が本来総合的なものとすれば、NPOも他の主体と連携を取ることで、総合的な主体が生まれることは自然なことであろう。

本稿で採り上げる事例は、「呉おや子劇場」を前身とする「呉こどもNPOセンターYYY」—以下、YYYと略記—である。以下、YYYの会員を対

* 呉大学社会情報学部 (Faculty of Social Information Science, Kure University)

** 呉こどもNPOセンターYYY (Kure Child NPO Center YYY)

象に行ったアンケート調査(注1)の結果および活動の分析によって、YYYが有する意義とその発展方向について考察する。

2. YYYの概要と分析の視点

(1) YYYの概要

具体的な検討に入る前に、YYYの概要と分析の視点について触れておきたい。YYYの前身は呉おや子劇場である。呉おや子劇場は1974年に発足し、その後1983年に、地域に根ざした活動をするという目的で3地区に分かれ、さらに2001年に再統合して一つになった。そして2002年に呉子どもNPOセンターYYYとなっている。

呉おや子劇場は、高度経済成長のうねりの中で、物質主義に偏重していく社会を危惧し、子どもたちに真の意味での「豊かな子ども時代」を保障していくことを目的として発足している。以来、子どもたちが自主的に参加して企画する「キャンプ」、「子どもまつり」等の自然体験・文化体験活動ならびに舞台芸術鑑賞活動等さまざまな事業を展開してきた。また活発なサークル活動、班活動(会費を集める単位が班であった)があったことが特徴であり、会員の面識的な関係に支えられていた会であった。

しかし子どもを巡る環境は大きく変化してきた。体験面では直接的体験から、携帯電話、携帯ゲーム、パソコンの普及による媒介的体験、バーチャルな体験が優位になった。また多様であった地域社会における物差しが、学歴主義の画一的なものになり、子ども一人ひとりの持ち味がそのまま評価される機会が乏しくなった。そしていじめ自殺や引きこもり、子どもが被害者や加害者になる事件が増加し、乳幼児期の子どもを抱えた若いお母さんたちのマニュアルのない子育てに対する不安や孤独感の結果としての虐待も増えてきている。このように子どもが抱える問題の増加と、その背景としての子どもの活動や子育てを支援する力の弱化が顕著になってきている。そしてこのような環境変化とともに、呉おや子劇場自体も次第

に会員数が減少し(最大会員数は1975年の2,462人であった)、活動の見直しが求められるようになっていた。

このような状況を踏まえ、活動指針の明確化と子ども活動・子育て支援のネットワーク化を図るという二点から会の立て直しが行われた。活動の明確な指針とは、「子どもの権利条約」(1989年国連で採択、1994年日本で批准)である。そこにはこれまで呉おや子劇場が行ってきた活動の重要性が謳われている。中でも、子どもの見方(子ども観)、子どももおとなも対等であるという精神は、子どもを人格ある社会の一員と位置付け、その権利と尊厳を保護することを求めたこの条約の精神そのものであり、呉おや子劇場の中心的理念であった。

以上の経緯から、2003年に、YYYが発足した。呉市及びその周辺地域の子どもたちが、地域の中で安心して育っていける社会の再構築を目的に掲げ、「子どもの権利条約」を指針に、子どもとおとなが対等なパートナーシップで、子どもが夢をもてる社会、生まれてきたことを喜びとして感じられる社会の実現にむけて、活動が進められている。

YYYは公益活動団体であるので、会の活動は開かれている。従って会員以外の活動参加もあり、また収益事業も行っている。そしてその活動を支えているのが会員と考えてよい。2006年9月25日時点でのYYYの会員構成は表1の通りである。

性格付けをみると、会員にも「推進」、「参加」、「支援、協力」という区分けがされている。これは正会員、子ども会員が中心となって会を運営することが期待されているということであり、またそれ以外の会員分類を設けることで、より多くの人々が係わりやすいようになっている。中心となる会員では、会の活動上、子ども会員が圧倒的に多いが、会費等で子ども会員の年会費が比較的低額なのは、子どもが融通できる範囲の金額で、自主的に参加できるようにとの考えからである。その分大人が支えることになる。ここにもおとなと

表1 YYYの会員構成

会員分類	性格づけ	会費等	人数（構成比）
正 会 員	この会の活動を推進する 18 歳以上のおとな	年会費：25,000 円	58 人（8.6 %）
子ども会員	この会の活動を推進する 18 歳未満の子ども	年会費：1,200 円	388 人（57.5 %）
参 加 会 員	この会の活動に参加する 18 歳以上のおとな	年会費：18,000 円	20 人（3.0 %）
賛 助 会 員	この会の活動を支援，協力する団体・個人	団体1口：10,000 円 個人1口：3,000 円	5 団体（0.7 %） 204 人（30.2 %）

子どもの協働という点が現れている。しかし実際は子ども会員は親が入会させるケースが多くなっている。

会員は年 17 パーセント程度が退会し、17 パーセント程度が入会している。子ども会員の退会が多いが、その主な理由は一定の年齢に達して、観劇をしなくなったということである。一定の年齢で加入し、一定の年齢で脱会するというのが大まかなストーリーである。しかしその後も活動を続ける層もいて、上述の正会員、参加会員という立場で参加しつづけている。

YYYの活動目的は、広くいえば、子どもの育つ環境づくりをすることであり、舞台芸術鑑賞活動と子どもの自主的活動を二つの柱にしている。活動内容については 2005 年度事業報告書からは次のように分類できる。①キャンプ活動、②親睦会やイベント、③小学生のサロン活動、④中・高生、18 歳以上の居場所づくり活動、⑤子育て支援サークル活動、⑥鑑賞活動、⑦子どもに関する研究会、⑧ホームページの運営である。この中で⑥鑑賞活動が最も金銭的にも労力的にもコストをかけている活動である。その他に⑨組織内・外に対する広報活動（会報の発行、チラシ・ポスター制作製—⑧のホームページの運営も機能としてはこの活動に含まれる）、⑩組織運営の活動（常任委員会、総会）を行っている。①～⑦の活動が目的に直結する活動とすれば、⑧～⑩はそれらの裏支えをする活動である。また①～⑦の活動は年一回程度の行事・イベントと月一回程度の定例活動からなっている。参考に 2006 年 7 月の行事スケジュールでは、星空映画会、子育て支援サークル、子ど

もに関する学習会、各部会など、毎週何らかの行事が組まれている。また NPO 法人として年一回の事業報告を行っている。組織運営は年一回の総会を意思決定機関とし、子ども活動部会、子育て支援部会、鑑賞部会、啓発広報部会等の各部会、常任委員会（13 人）で企画・運営を行っている。総会の出席率は毎回委任状を含めて 90 パーセント程度である。常任委員会は月一回ペースで開かれている。このメンバーが事実上の企画・運営を担う中心層になっている。

(2) 分析の視点

アンケート結果および活動の分析の視点として、あらかじめ二点挙げておきたい。第一は会員の積極的関与についてである。YYYは「この指とまれ」方式で成立する協同組織である。理念と現実の魅力が会員を惹き付けるが、逆にいえば、想いが違えばすぐに離脱していくという危うさを持っている。また YYY は会員が持っている唯一のネットワークというより、複数持っているネットワークの一つと考えたほうが良い。よって外部のネットワークとの兼ね合いで、YYYへのコミットメントは変わってくる。関与の強さは程度問題であり、例えば関わり方として役員（リーダー）、協力者、利用者がある。利用者であることは全ての会員に共通した立場であるが、そこにとどまれば、観客になってしまう。観客が過度に多ければ、その組織は停滞・衰退する。よっていかにして協力者層、リーダー層を増やすのが課題である。YYYの中に積極的関与につながるものがあるのかが問われる。

第二は外部の主体との連携についてである。子ども活動・子育て支援は広く捉えれば、18歳未満の子どもまで対象となる。それぞれの発達課題に応じて取り組むべき内容はさまざまである。また社会化は行政化、市場化も含む。よってその担い手も多様にあり得る。この状況でYYYだけが子ども活動・子育て支援を行っているのではないし、また全てを抱え込む必要もない。自らの長所を活かし、短所は他の主体が補い、結果として適切な公益活動が行われることが目指すべき方向であろう。つまりYYYの活動の展開を考えたとき、市民協働という方法が視野に入ってくる。そこでの自らの位置をどう定めるかが問われるところである。

以下、まずアンケート調査の結果に基づき、これらの点を分析する。

3. アンケート調査の結果

(1) 既存のネットワーク

YYYは協同組織であるので、会への参加は関心を同じくする者が、原則本人の自由意志で決めることになる（ただし活動の性格上、子ども会員の多くが親によって加入が決められていることは留意すべき）。加入の有無は、当人が関心を満たすことができると判断するかどうかで決まるので、YYYの活動が伝わる回路（情報の伝達構造）、誰の情報を尊重するか（影響力の構造）に注目する必要がある。情報の伝達構造（図1）をみると、メディアに比べて、クチコミの力が大きくなっている。子ども会員では、やはり「家族の紹介で知った」（58.3%）が多いが、「知り合いの紹介で知った」（37.5%）もある。おとな会員（上述の正会員、参加会員、賛助会員を合わせたもの）では「知り合いの紹介で知った」（65.1%）が圧倒的である。その場合の知り合いは、子ども会員（図2）では「通学している学校の同級生」（55.6%）、「友だちの親」（22.2%）が多い。またおとな会員（図3）では「仕事・職場での知り合い」（28.2%）、「地域の活動での知り合い」（25.8%）、「通っていた（いる）学校での友だちや友だちの親」（24.1%）、「通っていた（いる）学校での同級生」（24.1%）、「通っていた（いる）学校での上級生や下級生」（24.1%）が多い。

Q: YYY（呉おや子劇場）のことをどのようにして知りましたか。（当てはまるもの全て）

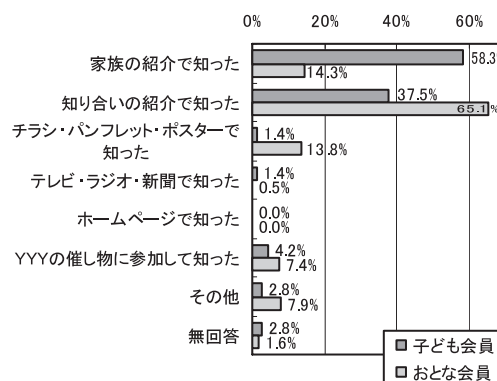


図1 情報の伝達構造

Q:（「知り合いの紹介で知った」と答えた人に）その場合の知り合いはどのような人ですか。

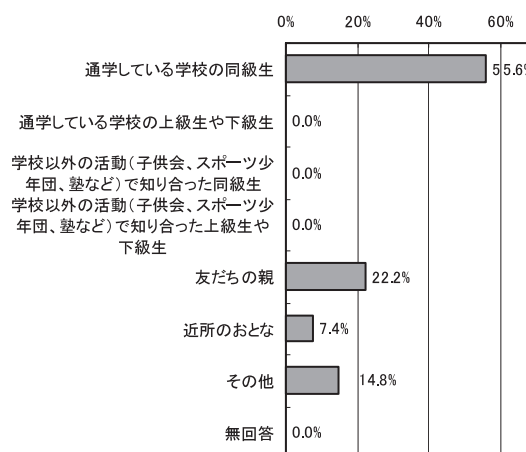


図2 情報を伝達された知り合い（子ども会員）

「通っていた（いる）学校での友だちや友だちの親」（24.2%）が多くなっている。

次に影響力の構造をみると、ここでもクチコミ優位が現れている。子ども会員（図4）では親の指示（「親の考えに従った」（62.5%））が多いのは会の特徴によるものであるが、「知り合いの紹介を参考にした」（22.2%）もある。おとな会員（図5）では「知り合いの紹介を参考にした」（56.6%）が多い。その場合のおとな会員の知り合い（図6）は「仕事・職場での知り合い」（29.6%）、「通っていた（いる）学校での友だちや友だちの親」（24.1%）、「通っていた（いる）学校での同級生」（24.1%）、「通っていた（いる）学校での上級生や下級生」（24.1%）が多い。

Q: (「知り合いの紹介で知った」と答えた人に) その場合の知り合いはどのような人ですか。

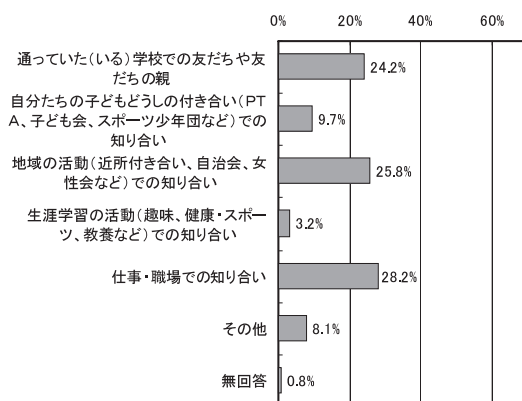


図3 情報を伝達された知り合い(おとな会員)

Q: YYYへの入会はどのようにして決めましたか。(当てはまるもの全て)

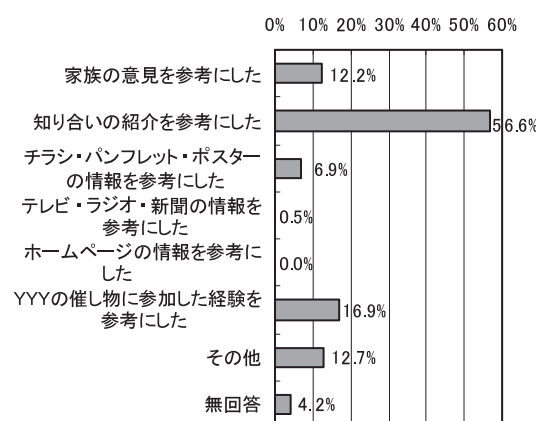


図5 影響力の構造(おとな会員)

Q: YYYへの入会はどのようにして決めましたか。(当てはまるもの全て)

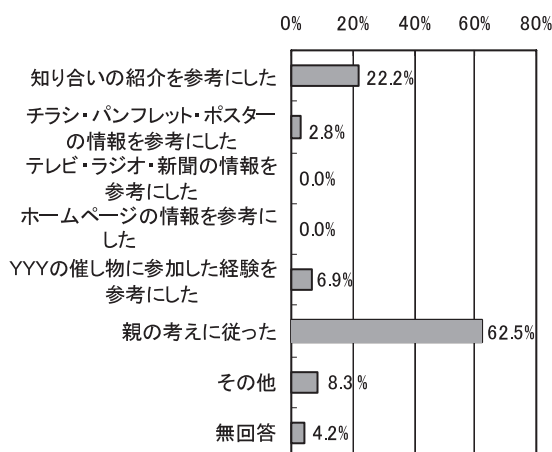


図4 影響力の構造(子ども会員)

Q: (「知り合いの紹介を参考にした」と答えた人に) その場合の知り合いはどのような人ですか。

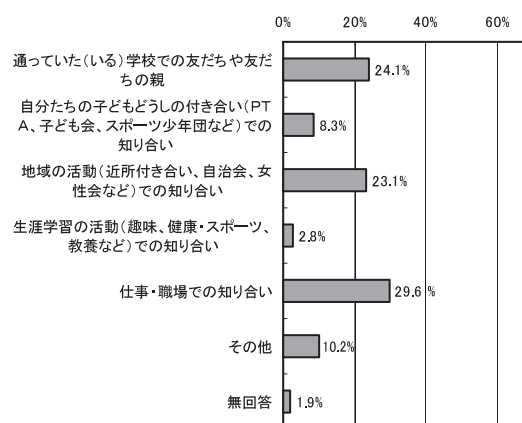


図6 影響力を受けた知り合い(おとな会員)

「地域の活動での知り合い」(23.1%)が多い。

以上のように、情報伝達の構造、影響力の構造においてクチコミ優位の特徴がある。情報と影響力は既に信頼がおかれている人のクチを通じて伝わっていくということである。既に信頼がおかれている人というのは、子どもの時期には家族、また学校での同級生、そしておとなの時期では地域活動や仕事・職場の相手が多い。このように会員の活動はゼロからというより、各会員の持っている既存のネットワークからスタートしていること

がうかがえる。

(2) 新たにできたネットワーク

しかし、YYYの活動は新たな関係財を創り出している。新しい人間関係の形成(図7)をみると、入会後に新しい縁(友だち・仲間)ができた(「3人以上できた」、「3人未満できた」を合わせたもの)のが、子ども会員では55.6%, おとな会員では54.0%ある。既存の関係から出発したYYYでの活動が、新たな関係財をつくるきっかけ・結

Q：YYYの活動に参加することで、新しく親しい人間関係はできましたか。

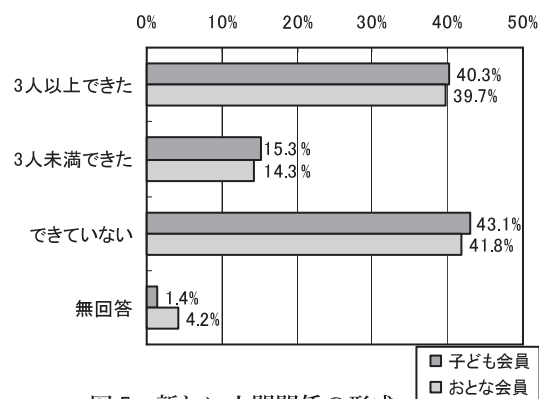


図7 新しい人間関係の形成

Q：YYYの中で、頻繁に会う友だち・仲間がいますか。

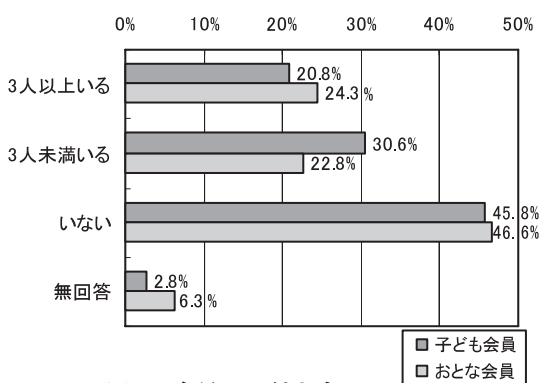


図9 会員との付き合い

Q：(「3人以上できた」、「3人未満できた」のいずれかを答えた人に) 新しい人との付き合いで、得られたものは何ですか。

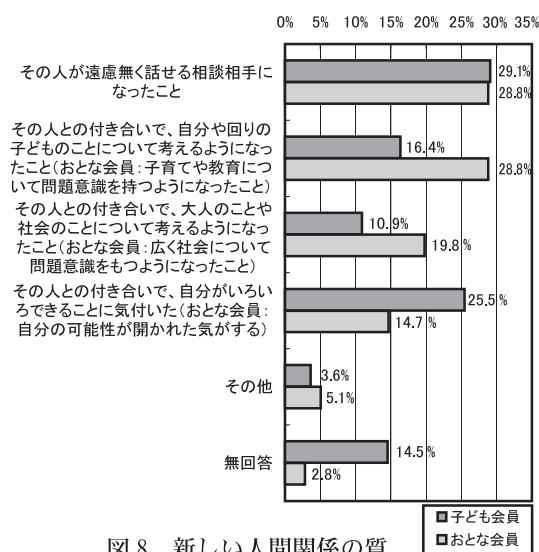


図8 新しい人間関係の質

節点になっていることがうかがえる。また新しい人間関係の質(図8)をみると、子ども会員では親密な付き合いができていないこと(「その友人が遠慮無く話せる相談相手になったこと」(29.1%))と同時に、「自分がいろいろできることに気づいた」(25.5%)、「自分や回りの子どものことについて考えるようになったこと」(16.4%)、「大人のことや社会のことについて考えるようになったこと」(10.9%)と自己の成長につながっているものであ

ることもうかがえる。おとな会員も同様に、「子育てや教育について問題意識を持つようになったこと」(28.8%)、「広く社会について問題意識を持つようになったこと」(19.8%)、「自分の可能性が開かれた気がする」(14.7%)が挙げられている。

なお会員との付き合い(図9)をみると、子ども会員では、頻繁に会う友だち・仲間がいる(「3人以上いる」、「3人未満いる」を合わせたもの)のが51.4%あり、「3人以上いる」と答えた会員の内86.7%と一緒に活動しているか、活動したいと思っている(活動希望(図10))。同様に、おとな会員でも、頻繁に会う友だち・仲間がいるのが47.1%あり、同じく86.9%と一緒に活動しているか、活動したいと思っている(活動希望(図10))。呉おや子劇場の活発な時期の特徴として、小規模単位での活動(班活動、サークル活動)が盛んに行われていたことがあった。そこには子どもどうし、親どうしの面識的な関係があった。現在でも、班という面的な組織化は困難としても、同様な面識的な関係が広がっていることがうかがえる。また面識的な関係はクチコミの回路でもある。活動に関する情報が会員の間でクチコミで伝わっていることが考えられる。

(3) 活動への参加、評価、展望

子ども会員の活動への参加は鑑賞活動、キャンプ、イベント、居場所づくり活動が多いが、昨年

Q: (「3人以上いる」と答えた人に) その人たちと一緒にYYYの活動をしていますか。

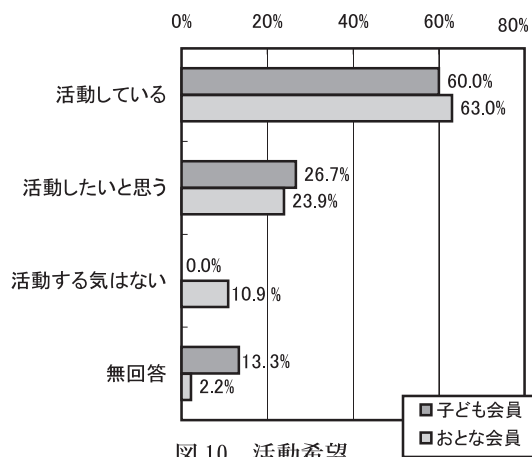


図 10 活動希望

Q: あなたが会員を続けている理由は何ですか。(当てはまるもの全て)

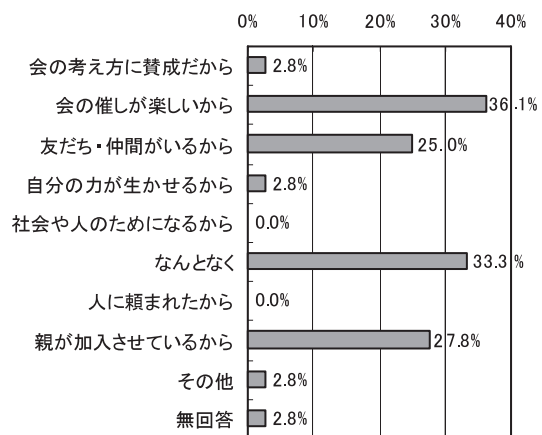


図 12 会員を続けている理由 (子ども会員)

Q: (昨年一年間に、以下の活動に参加「参加した」と答えた人に) では、参加した感想はどうでしたか。

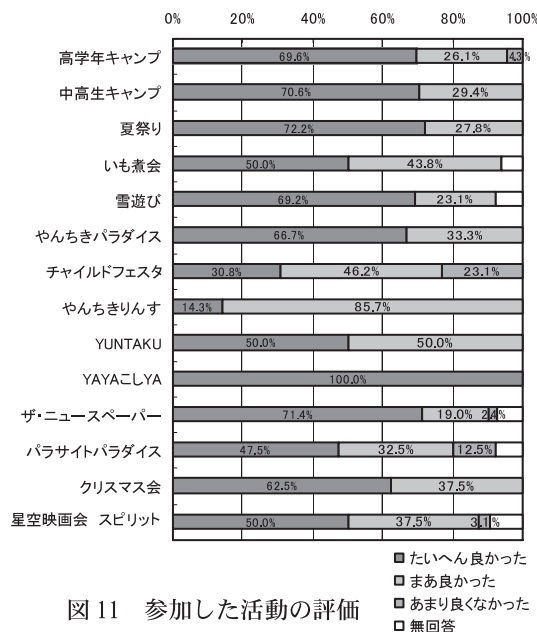


図 11 参加した活動の評価

Q: あなたが会員を続けている理由は何ですか。(当てはまるもの全て)

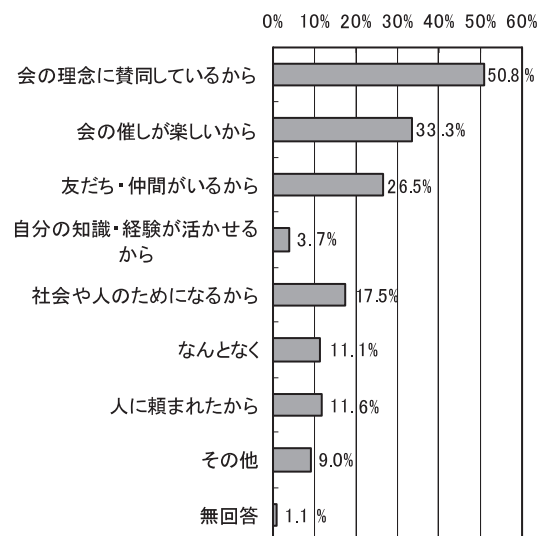


図 13 会員を続けている理由 (おとな会員)

一年間に参加したことのある活動の評価はいずれも高い (図 11)。会員を続けている理由 (図 12) としても、「会の催しが楽しいから」(36.1 %), 「友だち・仲間がいるから」(25.0 %) が挙がっている。子ども会員にとってはYYYの活動内容と同時に関係材がそこにあることが肯定的な評価を生んでいるといえる。おとな会員の会員を続けて

いる理由 (図 13) では、「会の考え方に賛成だから」(50.8 %) という会の哲学への賛同が最も多く、次いで「会の催しが楽しいから」(33.3 %), 「友だち・仲間がいるから」(26.5 %) という子ども会員と同じ理由が挙がっている。また「社会や人のためになるから」(17.5 %) という社会貢献意識も挙がっていることが特徴である。おとな会員は楽し

Q：これからYYYはどのような活動を充実していけばよいと思いますか。（当てはまるもの全て）

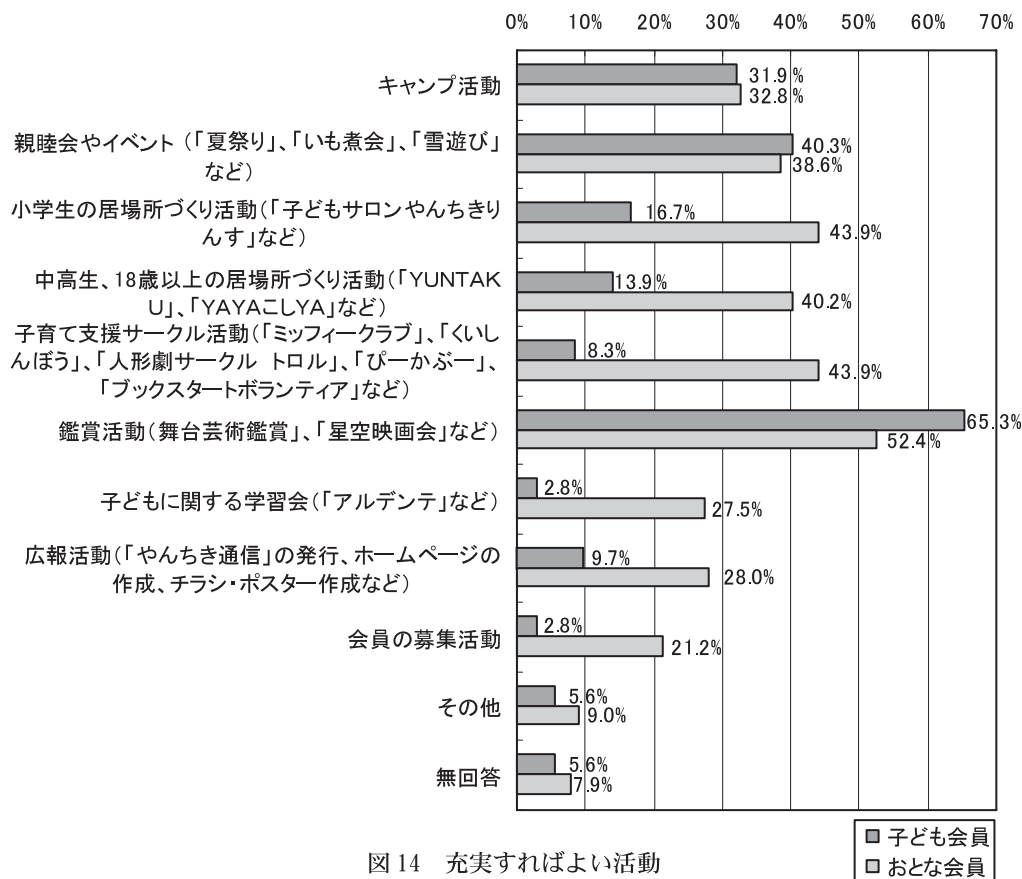


図 14 充実すればよい活動

さや友達といった、活動から直接得ることができるものと同時に、社会的意義といった観点からも会の活動を反省的にみていることになる。

充実すればよい活動（図 14）では、子ども会員はやはり「鑑賞活動」（65.3%）、「親睦会やイベント」（40.3%）、「キャンプ活動」（31.9%）が多い。おとな会員ではそれら以外にも「小学生の居場所づくり活動」（43.9%）、「子育て支援サークル活動」（43.9%）、「中高生、18歳以上の居場所づくり活動」（40.2%）、「広報活動」（28.0%）、「子どもに関する学習会」（27.5%）も挙がっている。この点でもおとな会員は会の活動を反省的にとらえているといえよう。

（4）対内・対外コミュニケーション

YYYには「やんちき通信」とホームページというメディアがある。前者は会員向けに月一回送られるA3両面刷り3枚（A4で12ページ）程度の紙媒体である。紙面構成は、（ア）子どもの姿を取り上げるページ、（イ）社会・子どもを取り巻く環境について、タイムリーに投げかけるページ、（ウ）子どもに関わる人たちのコラムのページ、（エ）イベント報告のページ、（オ）子ども活動部・子育て支援部・鑑賞部が、それぞれの活動を知らせるページ、（カ）子ども・青年からの投稿記事を掲載するページ、（キ）異地域の子ども・青年の文化活動にスポットをあてるページ、（ク）中高生の活動について、中高生が編集するページとなっている。もっぱら対内広報として用いられるもので

ある。ホームページは当然公開されているが、構成は、(ア)トップページ、(イ)YYYって、(ウ)トピックス、(エ)YYY学習会(アルデンテ、おとな塾)、(オ)子どもの活動(主に小学生以下を対象とした「やんちきりんす」、中高生対象の活動「YUNTAKU」)、(カ)鑑賞活動、(キ)子育て支援、(ク)Web通信、(ケ)掲示板、(コ)過去の部屋(前年度までの事業をみることができる)、(サ)リンクとなっており、これも対内広報として

用いることが可能である。

まず「やんちき通信」については、会報について(図15)をみると、子ども会員は62.5%が読んでおり(「毎回必ず読んでいます」と「時々読んでいます」を合わせたもの)、紙面の評価はいずれも高い(会報の評価(図16))。おとな会員では93.6%が読んでおり(「毎回必ず読んでいます」と「時々読んでいます」を合わせたもの)、同じく紙面の評価はいずれも高い(会報の評価(図16))。現時点での対内広報としては紙媒体は効果的といえる。しかしホームページについて(図17)をみると、ホームページは子ども会員の83.3%が見ておらず、またおとな会員も78.8%が見ていない。これは閲覧環境に難があるのかもしれないが、見ている会員の評価はいずれも高い(ホームページの評価(図18))なので、将来的には対内的広報の媒体へと発展するかもしれない。しかし現状ではむしろ対外的広報としての性格付けを持たせることも考えて良いだろう。

そして対外的広報の有効な手法としてクチコミがある。子ども会員の活動を話す相手(図19)を

Q：あなたは月一回発行する会報(「やんちき通信」)を読んでいますか。

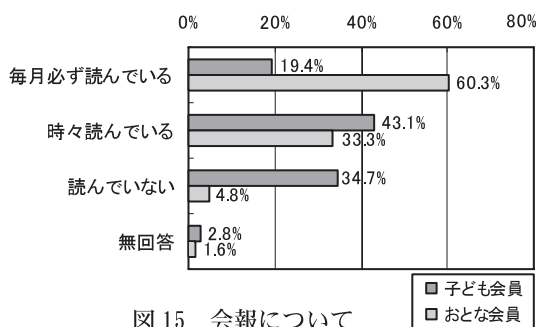


図15 会報について

Q：「やんちき通信」について、あなたの意見を聞かせてください。

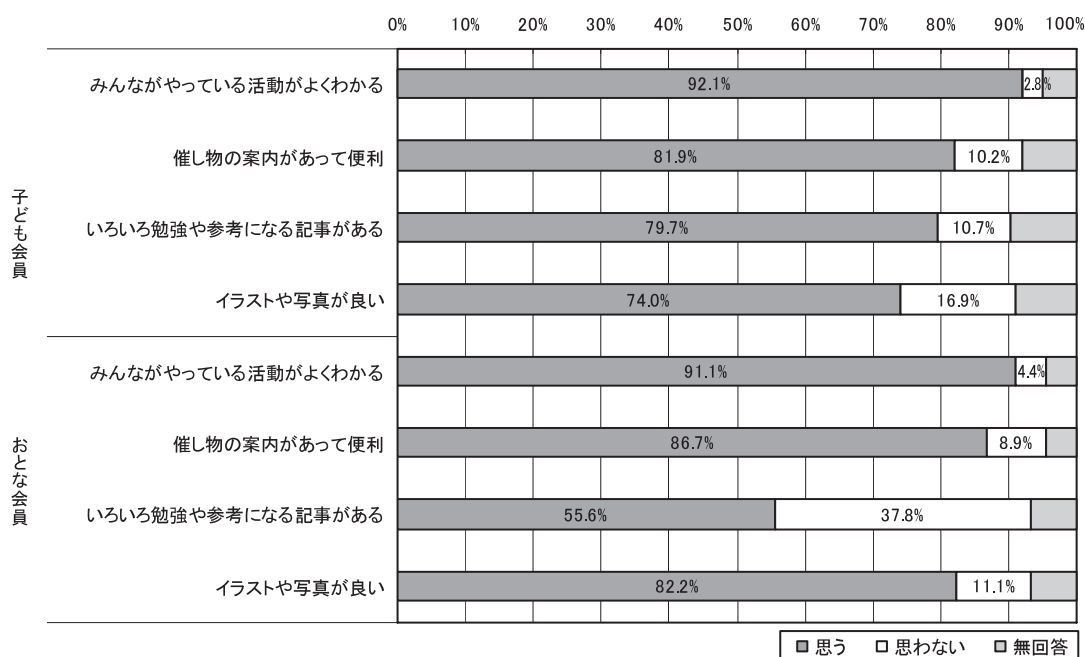
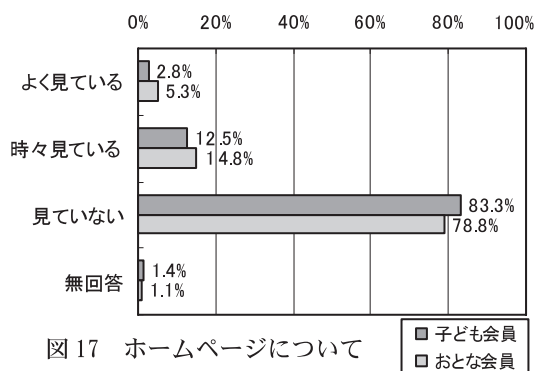


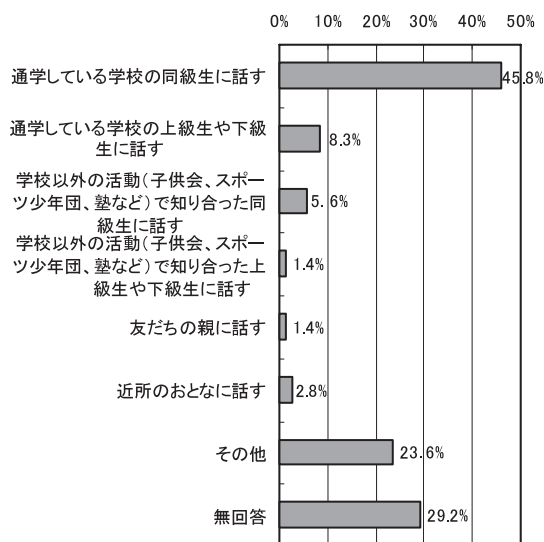
図16 会報の評価

みると、子ども会員では同級生に 45.8 %が会の活動について話している。おとな会員（図 20）では「仕事・職場での知り合いに話す」（33.9 %）を筆頭に複数の縁で話している。つまり新しいネットワークと共に、既存のネットワークも生きてお

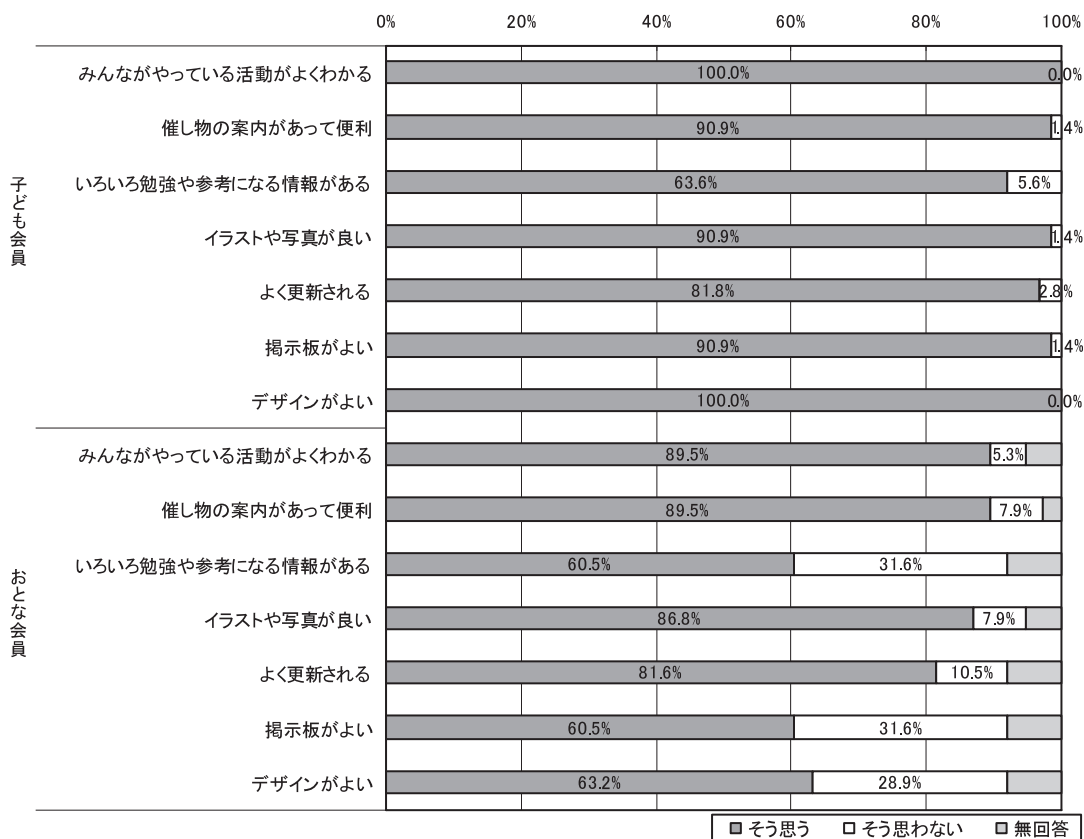
Q：あなたはYYYのホームページを見えていますか。



Q：あなたはYYYの活動について、まわりの人に話しますか。（当てはまるもの全て）



Q：YYYのホームページについて、あなたの意見を聞かせてください。



り、そこから新たな会員を発掘できる可能性がある。

(5) 協力者・リーダーへの志向

子ども会員の活動への関わり方をみると（図21）、リーダーや協力者になったことがある実績（「企画や運営を担当するスタッフや実行委員をやったことがある」と「企画や運営の手伝いをしたことがある」を合わせたもの）は56.9 %である。またそのような志向（「機会があれば、企画や運営

Q：あなたはこれからYYYの活動にどのように関わっていきたいですか。

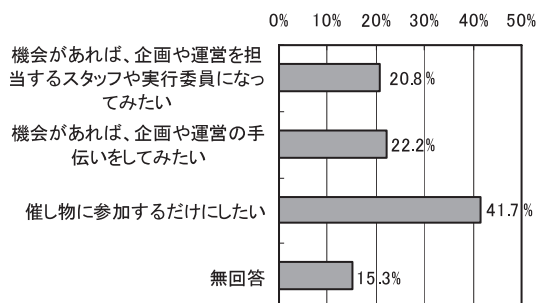


図22 関わり方の志向（子ども会員）

Q：あなたはYYYの活動について、まわりの人に話しますか。（当てはまるもの全て）

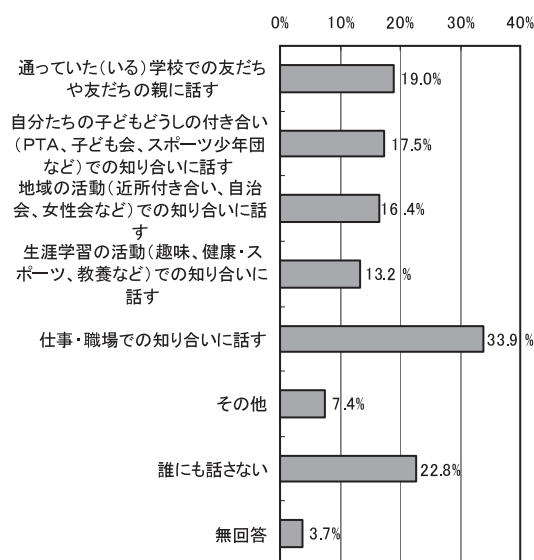


図20 活動を話す相手（おとな会員）

Q：あなたはYYYの活動にどのように関わってきましたか。（当てはまるもの全て）

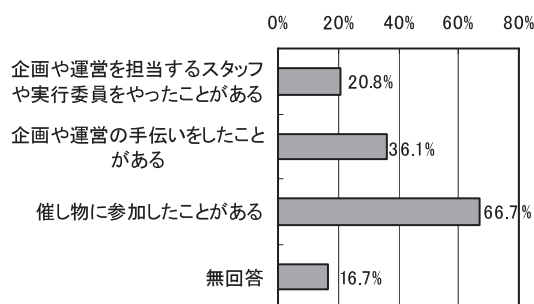


図21 活動への関わり方（子ども会員）

を担当するスタッフや実行委員になってみたい」と「機会があれば、企画や運営の手伝いをしてみたい」を合わせたもの）は43.0 %である（関わり方の志向（図22））。実績と志向の両面で非常に高い数字である。その場合の活動対象（図23）では、やはり「キャンプ活動」（23.7 %）、「鑑賞活動」（15.8 %）、「親睦会やイベント」（14.5 %）が挙げられている。もちろん子ども会員はYYYでの活動以外にも楽しいものを持っており、生きがいを感じる活動（図24）では、「学校での勉強以外の活動」が46.9 %となっている。また活動のバランス（図25）では「YYYとそれ以外の活動をバランスよく行いたい」が46.7 %となっている。他方おとな会員では、実績（活動への関わり方（図26））では57.1 %、志向（関わり方の志向（図27））では20.6 %である。志向面では子ども会員と比べて低い。正会員だけで集計すると（関わり方の志向（図28））、41.3 %となっている。またおとな会員の活動対象（図29）では、「親睦会やイベント」（18.8 %）、「キャンプ活動」（14.5 %）、「鑑賞活動」（12.8 %）、「子育て支援サークル活動」（12.8 %）が挙げられている。また生きがいを感じる活動（図30）は、「生涯学習の活動」（37.6 %）、「仕事」（37.0 %）が多く、活動のバランス（図25）では「YYYとそれ以外の活動をバランスよく行いたい」は42.5 %である。

Q:「機会があれば、企画や運営を担当するスタッフや実行委員になってみたい」、「機会があれば、企画や運営の手伝いをしてみたい」のいずれかを答えた人に、具体的にはどの分野で活動したいですか。(当てはまるもの全て)

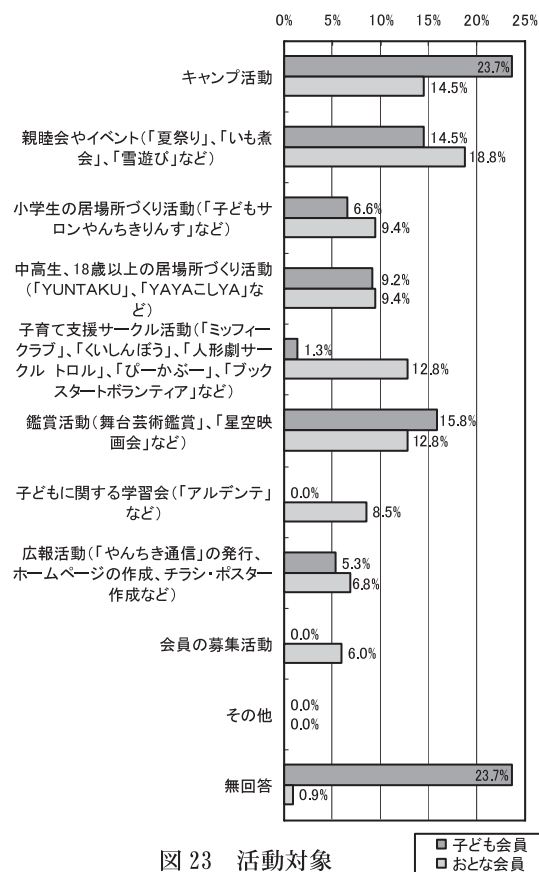


図 23 活動対象

Q: YYY以外で行っている活動で、楽しいものは何ですか。(当てはまるもの全て)

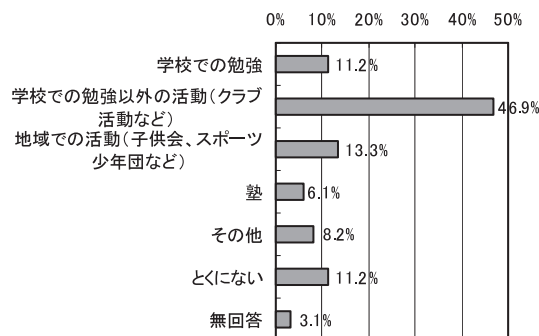


図 24 生きがいを感じる活動(子ども会員)

Q: YYYの活動と、それ以外の活動とのウェイトはどう考えていますか。

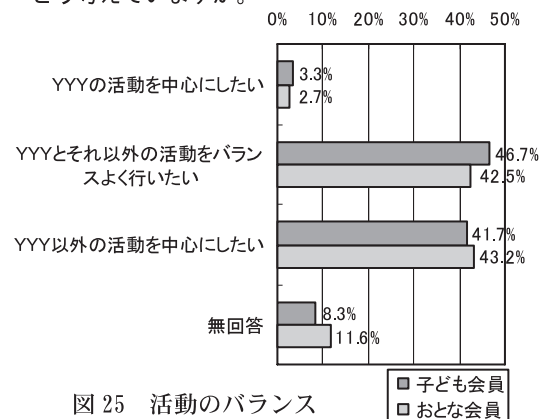


図 25 活動のバランス

Q: あなたはYYYの活動にどのように関わってきましたか。(当てはまるもの全て)

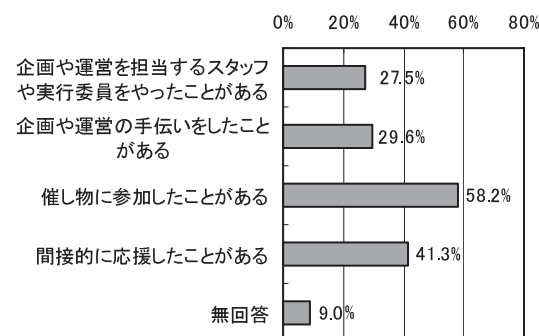


図 26 活動への関わり方(おとな会員)

Q: あなたはこれからYYYの活動にどのように関わっていきたいですか。

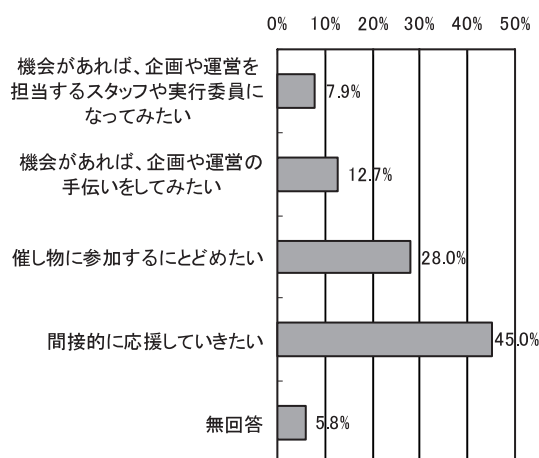


図 27 関わり方の志向(おとな会員)

Q：あなたはこれからYYYの活動にどのように関わっていきたいですか。

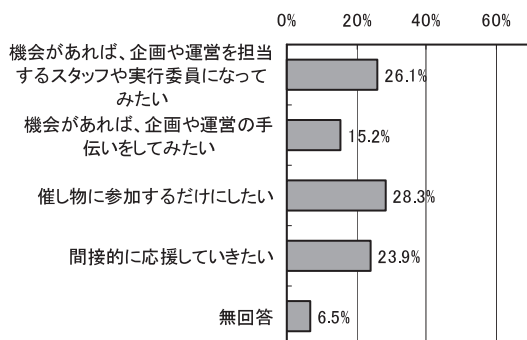


図 28 関わり方の志向（正会員）

Q：YYY以外で行っている活動で、楽しいものは何ですか。（当てはまるもの全て）

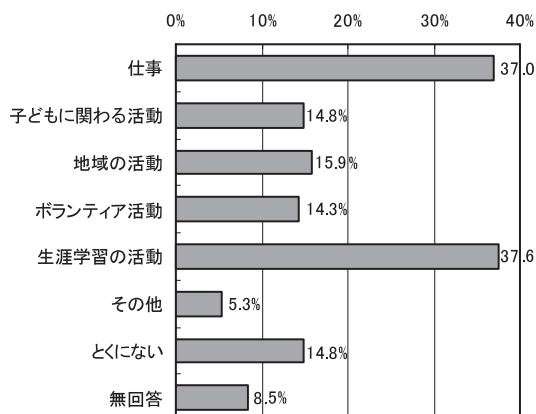


図 30 生きがいを感じる活動（おとな会員）

Q：（「機会があれば、企画や運営を担当するスタッフや実行委員になってみたい」、「機会があれば、企画や運営の手伝いをしてみたい」のいずれかを答えた人）では、具体的にはどの分野で活動したいですか。（当てはまるもの全て）

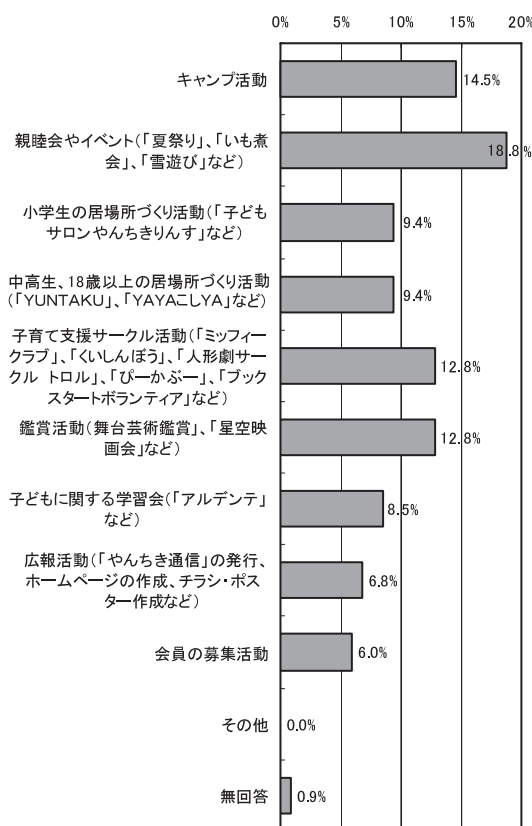


図 29 活動対象（おとな会員）

（6）問題認識、外部との連携

問題認識（図 31）をみると、おとな会員は「会員数が少ない」（43.4 %）、「外部へのアピールが少ない」（25.4 %）を多く挙げている。両者は関連しあっているが、アピールはより発展的には連携にもつながる。外部との連携の必要性（図 32）をみると、77.2 % がその必要性を認めている。YYY がどの点で自らの力を活かし、どの点で他の団体から補ってもらえるのか、それがこれからの市民協働という形での発展のポイントであろう。

以上、アンケート調査の結果を分析した。会員にとってYYYというネットワークは、既存のネットワークとつながっている新しいネットワークである。既存のネットワークは子ども会員にとっては、多くは同級生のネットワークである。またおとな会員にとっては、多くは地域の活動と仕事・職場のネットワークである。いずれにせよ会員は複数のネットワークの上で活動している。新しいネットワークは親密性と共に、自己成長につながる質のものもあり、会員の評価は活動内容と共に、この関係財に対しても高い。またそこでは面識的な関係も作られている。

会員の積極的関与という点では、子ども会員の 43.0 %、正会員の 41.3 % が協力者・リーダーへの志向を見せているのは大きな数字である。活動内

Q: 現在YYYが抱えている問題は何だと思いますか。
(当てはまるもの全て)

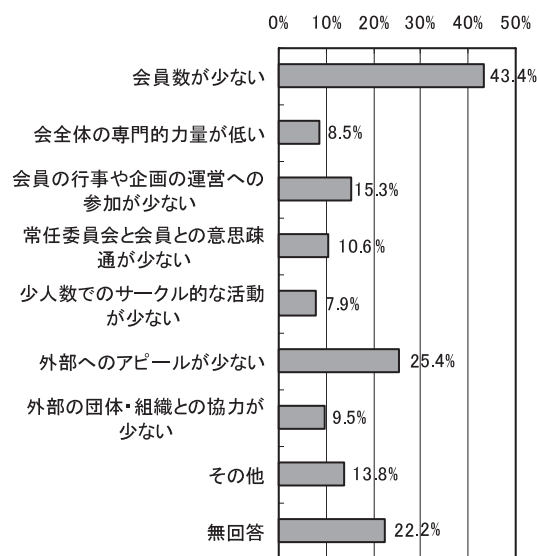


図 31 問題認識

Q: YYYと、行政、地域集団（自治会など）、生涯学習の団体などとの連携についてどう思いますか。

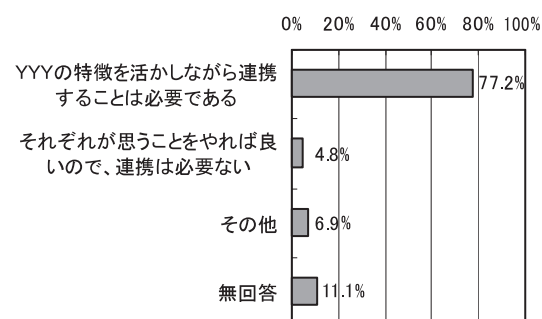


図 32 外部との連携の必要性

容と関係財の魅力が積極的な関わりにつながっていることがうかがえる。また外部の主体との連携の必要性も認められている。仮に市民協働という方法考えた場合、そこでは公益活動を行う諸団体が、自らの特徴を活かして連携するというのがポイントである。結局、市民協働における立場もYYYの活動の特徴（魅力と課題）によって定まってくることになる。次にYYYの実際の活動に注目し、会員の積極的な関与を生み出し、また市民

協働における立場を決める活動の特徴を分析する。

4. 具体的活動の分析

(1) 積極的関与を生み出す活動の特徴

上述のように、YYYは子どもの権利条約に自らの理念を求めている。子どもの人権の尊重を重視している。YYYの基本的な考えは、おとなにできることは、子どもが多様な価値観と出会える場を保障していく、つまり環境整備と、そこに付き合うということである。簡単に言えば、子どもの自立を促し、おとなはそれに寄り添うということである。以下、呉地域の状況に触れながら、YYYの活動方針が端的に表れている①舞台芸術鑑賞活動、②キャンプ活動、③居場所づくり活動を採り上げ、その活動の特徴を明らかにする。

①舞台芸術鑑賞活動

舞台芸術鑑賞活動については、YYYは呉地域全体の子どもたちを対象に定期的・継続的に行っている（YYYになってからの4年間で、13本の鑑賞事業を行い、のべ4,416人—子どもが2,466人、おとなが1,950人—が参加している）。呉地域ではその他には単発的に、幼稚園、保育所、学校、公民館等が所属する子どもを対象に行ったり、新聞社やスーパー等が社会貢献活動の一環として行ったりするもの、ホール主催のものなどがある。

YYYの舞台芸術鑑賞活動の何よりの特徴は、子どもたちを観客・利用者にとどめるのではなく、製作サイド、運営サイドに参画してもらっていることである。企画は他都市で行われる試演会を観に行き、納得がいく作品についてどのようなメッセージを載せて社会に発信していくかということもあわせて会議に提案し、決定していく。製作サイドについては、例えば芝居の中で、疑似体験したり、芝居からメッセージをうけとめることは、それ自体価値のあることであるが、さらに脚本家、演出家、舞台美術、衣装、照明、音響等のコラボレーションによって作品が作り上げられる

過程を理解することを目指している。具体的には、舞台を鑑賞する前に、役者や演出家に来てもらって、ワークをしたり、交流したりしている。その中で、舞台の表にはなかなか出てこない話を聞いたりもする。つまり舞台芸術鑑賞活動に表現リテラシーの学習も含ませている。また運営サイドの企画では、企画自体を高校生理事と一緒に決定することを始め、道具の搬入搬出の手伝い、ロビーの会場づくりやもぎり、会場整理等を行い、運営サイドとしても基本的なことを身につけるようにしている。

各舞台芸術鑑賞活動において、毎回およそ 30 名程度がスタッフとして関わり、そのうち 10 名程度が子ども会員である。子どもスタッフについては、子ども理事を中心に、役員の子どものキャンプ等でつながりができた子どもたちが担っている。子どもたちは、その役割について、面倒がるよりも当てにされる、信頼されていると感じている様子で、主体的に楽しみながら取り組んでいる。主な要因としては、子どもの発達段階に応じて役割を任せ、「あんなことができるようになりたい」、「いつか、あの仲間に入りたい」と思えるような見せ方を心がけてきたことがある。「あこがれ」という動機付けに心がけてきた。実際に活動を通してつながりができた子どもたちが、次の企画において、主体的にスタッフとして関わるようになっている。

一方のおとなスタッフについては、そのほとんどが役員であるが、そこでも経験を考慮して役割を段階的に振り分けている。子どもとの関わり方については、直接子どもと関わる経験を通して、「対等に関わる」という意味を体感しており、面白い、達成感があると考えている。それらの体験が、次の企画への意欲につながっている。

②キャンプ活動

県地域において、キャンプ活動は幼稚園・保育所・学校、子ども会の行事として、また、部活やスポーツ少年団の合宿、そして、事業所がイベントとして提供する場合などさまざまな形態で行われていると考えられる。YYYでは、デイキャン

プを始め、おや子キャンプ、高学年キャンプなど年間に 5～7 回のキャンプ活動を行っている。YYYになってから 2007 年 11 月までに、21 回キャンプを行い、のべ 1,205 人が参加している。ここではおや子劇場の時代より、特に力を入れて継続している高学年キャンプの特徴を述べる。高学年キャンプの特徴の第一は、そこが異年齢の人間の交流の機会になっていることである。地域の崩壊が言われて久しい今日、小学生から大人までが、家族単位としてではなく、集ってキャンプをする事自体に価値がある。いろいろな大人の中で育つことは特に意義がある。第二にそこが子どもの自主性を育てる場となっていることである。8月のキャンプに向けて、4月から中高生を中心に実行委員会を立ち上げ、企画を進めていく。キャンプ当日、他者と関わりながら、火をおこしたり、ご飯をたいたり、レクリエーションを体験したりすることも重要であるが、企画を進めていくプロセスにも価値がある。大人の関わり方は、基本的にはそれに付き合うというだけで、特別何かをしてあげるといったものではない。命に関わるとか、他者の人権侵害につながるという場合を除いて、大人側からの規制はほとんど無い。子どもたちは、日常のルールありきの生活からの解放感を味わうが、同時に、自己コントロールする厳しさや不安を体験することにもなる。つまり自由の意味をつかむことになる。

高学年キャンプは、毎年、2泊3日のスケジュールで行い、毎回 50～60 人の参加があり、そのうち中高生の参加者は 30～50 人程度である。キャンプ中の活動は、8～10 人程度の班ごとに全員参加で取り組まれ、参加経験の多い中高生が必然的にリーダーになっている。事前に、全体会という各班のメンバーが顔を合わせる機会をつくり、また当日までに、より知り合えるようにするため、班旗を作るなどの作業を意図的に入れ、1～2 回程度の班会を開いている。キャンプ活動を通して、火がおこせる、ご飯が炊ける、テントがはれるなど、できるようになることがたくさんあり、自分の成長を実感でき、達成感がある。また

人間関係も広がり、それらの経験が、次の活動を企画する意欲につながっていく。

一方おとなの参加者は、毎回4～6人程度で、主に役員が担っている。主な役割はトラブルが起こった時の対応で、けが人や病人が出たときには、病院へ連れて行ったりする。またおとなの参加者は、キャンプ活動を通して子どもたちの成長を目の当たりにするので、キャンプ活動の意義を体感することができる。さらに余計な口を挟まない、待つことができるようになるなど、寄り添うおとなとして少しずつシフトする自分自身についても実感でき、達成感が大きいので、子ども同様、次の活動を企画する意欲へとつながっていく。

③居場所づくり活動

居場所づくり活動については、子どもの年齢によって、(ア)乳幼児対象のもの、(イ)小学生対象のもの、(ウ)中高生対象のものに分かれる。(ア)乳幼児対象のものに関して、呉市は子育て支援モデル地域でもあり、呉市の子育て支援センターが2ヶ所、国の事業として保育所が行っている地域子育て支援センターが4ヶ所ある。また地域によっては、主任児童委員が中心になって行っている子育て支援サークルや、子育て中の親が自主的に行っている育児サークル等もある。YYYの活動としては、(a)子育て支援サークル(常設の子育て支援センターがない焼山地域において、「くいしんぼう」という子育て支援サークルを準備も含めて毎月2回行っている。1回平均5～10組のおや子が参加)、(b)子育て中の親の社会参画応援事業としてのブックスタートボランティア派遣事業(呉市が6ヶ月健診時におこなっているブックスタート事業に、毎月1～2回ボランティアとして、乳幼児を抱えているお母さんたち3人程度を派遣する。その際、子どもたちの託児も互いに引き受ける。ボランティアスタッフ費は行政からは出ていないが、YYYから支払われている)、(c)人形劇サークル、(d)絵本会などである。(a)子育て支援サークルは、公の子育て支援センターがない地域において行っている(昨年度

まで広地域において行っていたサークルは、今年度、広に支援センターが開設されたので、廃止した)。他のサークル活動については、社会の空気を「子どもがいるから大変だ」から「子どもがいるから楽しめる」に変えていきたいとの思いから行っている。

多くの場合、子育て支援が子育て中の親支援であるのに対し、YYYの子育て支援は、あくまでも子ども支援である。例えば「オムツを外すこと」について、一般的な子育て支援は「○才なのに、まだオムツがはずれてないの?」などと、その親を非難するようなことは言わないという立場に立つが、YYYでは、オムツから解放される方がその子にとっても自由に動けるようになっていいではないかという立場に立つ。つまり、子ども自身が自立していくことを応援することが子育て支援と考えている。またそのような子どもの自立支援が親支援につながっていくものと考えている。

YYYの子育て支援活動を通して、子どもは自分の所有物ではなく、自分とは別の一つの人格であるという当たり前のことを再認識するようになる。子どもが思い通りにならないという悩みから解放され、子育てにゆとりができ、社会的な課題に対して目を向けることができるようになる。そしてその課題解決に向け、主体的に取り組む側にまわっていく。

次に(イ)小学生対象のものに関してである。呉市内における小学生対象の居場所としては、児童館が3ヶ所、ほとんどの小学校において行われている、帰宅時に保護者が留守である3年生までの子どもを対象とした放課後児童会、各種スポーツ少年団、さまざまな習い事、塾などが挙げられる。YYYが小学生を対象にした居場所づくりを始めたのは、2003年4月からである。前年度から始まった学校完全週休2日制を受けて、毎月1回土曜日に、子どもたちの居場所の一つとして開設した。それは前述したように、何かすべきことがある子どもが行ける場所や、ゲームセンターのように、お金があれば遊べる場所はあるが、特に何かしたいことがあるわけではなく、またお金が

なくても安心して行ける場所、つまり児童館のようなところが必要ではないかと考えたからである。また小学生の集う場所なので、小学校区ごとに、そして日常的に開設されていることが望ましいとも考えた。しかし当時の体制でできるところから始めようと、とりあえず、呉市中央地域にある社会教育施設でモデル的に始めることにした。具体的には、ゴロゴロできるようにマットを敷き詰め、漫画や工作セット（折り紙やのり、はさみなど）、オセロゲームや人生ゲーム、トランプくらのものを準備して開設した（2006年度実績では年間14回開設し、のべ500人のおや子が参加した）。

一回あたりの参加者は、30人前後のおや子連れである。市の広報誌をみて申し込んでくる人でも、人間関係が広がった後はリピーターとなって参加している。おとなの場合、参加しているうちに気心が知れるような関係性が生まれ、継続的な参加につながり、さらに企画サイドに立つようになっていく。子どもの場合は、親に連れてこられるうちに、年長者との関わり等を経験し、参加することが楽しみになっていくようである。リーダーになりたいというよりも、年長者の仲間入りがしたい様子うかがえる。

また（ウ）中高生の居場所に関して、現在、中高生の放課後、土・日の居場所としては、学校でのクラブ活動、塾、習い事などが考えられる。その他にも郊外にある大型スーパーのフードコート等も居場所になっているようである。中高生の居場所づくりについては、家庭、学校以外での人間関係の構築、つまり日常の人間関係以外の開かれた環境づくりを目指している。また小学生の居場所づくりと同様に、何もしなくても居て良い場所を提供したいと考えて始めた。具体的には、YYYの事務所で毎月1回程度、おやつを食べながら、おしゃべりをしたり、近くの公園で遊んだり、と中高生のサロンのような場所である。参加費は1回100円である（2006年度実績で、年間12回開設し、のべ112人が参加）。

一回あたりの参加者は10人程度で、ほぼメン

バーは固定している。今のところ、なんとなく集まっている、集められているといった感じで、人が集まっているところへの参加はしたいと考えているが、その場所を開設する意味についての理解は進んでいないのが現状である。また何かイベント等がある時には、スタッフや参加者として声をかけて欲しいと考えている様子うかがえる。中高生の場合、一見むだに思えるような時間の共有の中から、新たな発想が生まれてきたりする。彼らにとって優先順位の高い場所ではないが、あそこに行けば誰かがいる、いつ行っても受け入れてもらえると思われるような場所になっていけば良いと考えている。また場所の運営について、中高生がもっと主体的に参画するようになれば、クリエイティブな面白い場所になっていくのではないかと考えている。

以上、三つの活動をみてきたが、いずれも比較的少人数の面識的關係の中で行われており、自己の成長につながるような関わり方が意図的に作られている。このような活動内容と関係財の魅力が会員の積極的な関わりを生み出すことになる。

（2）他団体との連携

YYYの活動が他では提供されにくい魅力的な活動であることは確かである。しかし子ども活動・子育て支援の社会化という共通目標の下では、ヒト、モノ、情報、お金といった点で他団体との連携の可能性は当然考えられる。

例えば①舞台芸術鑑賞活動について、呉地域において舞台芸術鑑賞の機会は非常に少ないのが現状であり、どう文化面でのまちづくりを進めていくかは重要な課題である。現在は、YYYは名義後援という形態での呉市との連携にとどまっているが、さらにホールとの共催や、ホール・公民館の企画・運営への関わり、あるいは幼稚園・保育所・学校公演等についてもアートマネジメントの立場での関わりを探っていくことは可能である。

また③居場所づくり活動の（ア）乳幼児対象のものでは、既に現在年1回、他団体主催の子育てイベントに主体的に参加したり、他の子育てサー

クルに人形劇サークルや絵本会がボランティアとして参加したりしている。また保健所が6ヶ月検診の際に行っているブックスタート事業に、ブックスタートボランティアを派遣している。さらに(イ)小学生対象のものについては、呉市全域において、子どもたちに何か体験させるための居場所づくりは進んできたが、何もしなくても居て良い場所は、なかなかないのが現状である。このような活動は、それぞれの地域の学校の余裕教室や各公民館で、地域のネットワークを活かしながら行われることが望ましいと考える。各地域の子どもに関わりたいたいと思っている人たちと連携しながら進めていきたい活動である。

YYYの強さは、協力者やリーダーとして積極的に関わろうとする意識を持ち、活動ソフトを蓄積した人的資源である。さらに市民協働という形の中で、自らの活動を拡大させるとともに、弱さを補っていくことが考えられて良いだろう。

5. おわりに

最後にYYYの活動の意義と発展方向という点からまとめておきたい。今、必要なことは、社会の中での子育てであろう。しかしその社会が遠すぎたり、大きすぎたり、硬直してははその効果は薄い。子育てに必要な社会はもっと身近なものである。その意味で、家庭の外にあって、かつ全体社会の手前にある中間社会（地域社会）がもっと充実する必要がある。そうである場合に、子ども・親が孤立せず、かつ個別的な対応が可能になる。YYYの活動の意義は、その特徴的な活動を通して、地域社会における一つの有効なネットワークを提供していることである。活動内容や関係財への肯定的な評価、また協力者・リーダーへ

の志向の高さ、面識的関係の豊かさがそれを示している。

他方で地域社会に眼を向けたとき、子ども活動・子育て支援に関わる担い手はさまざまにある。YYYは市民活動、住民の相互扶助の系に属する協同組織である。そして目標が共通のとき、互いに連携しようというのが市民協働である。YYYの発展方向として考えられることは、市民協働の中で自らの活動を展開することである。そこでは各主体の特徴に応じて、各種資源が融通される。YYYの強さは人的資源にある。既に市民協働の取り組みがなされている部分もある。また事務局の充実もこれからの重要な課題である。有償化によってそれを進めていくとすれば、その費用の捻出が問題になる。会費、収益事業、委託事業などの選択肢があるが、結局はネットワークを広げ、活動の社会的意義を周知しながら、さまざまな団体や個人とのつながりを築いていくことで可能になる。

謝 辞

アンケート調査にご協力いただいたYYYの会員のみなさんに深く感謝します。

注

- (1)「呉こどもNPOセンターYYYの活動についてのアンケート調査」。実施時期：2006年9月27日～10月20日。調査方法：各会員にアンケート用紙を郵便あるいは手渡しで配布し、記入後、郵便あるいは手渡しにて受け取る。アンケート対象者等は下表のとおりである。なお賛助会員については個人を、また子ども会員については小学校5年生以上を対象にした。

アンケート対象者等

対象者	正会員	参加会員	賛助会員	子ども会員
配布数	58人	20人	207人	165人
回収数	46票	17票	124票	72票
回収率	79%	85%	60%	44%